

西行の和歌と崇徳院

西村 真 一

讃岐の院の位におはしましけるをりの御幸の鈴の奏をききてよめる

(1) ふうにけり君がみゆきのすずのそうはいかなる世にもたえずきこえて

白峯と申しける所に、御はかの侍りけるにまゐりて

(2) よしや君昔の玉のゆかとてもかからむ後は何にかはせむ

右の二首の歌は、西行の「山家集」にあり、いずれも、西行が崇徳院との関係において詠んだ歌である。

(1) は、詞書から、崇徳院の在位中の作であることが知られる。崇徳院は、保安四年（一一二三年）一月に即位し、永治元年（一一四一年）十二月に退位された。したがって(1)は、西行（俗名佐藤義清、又は範清）の七歳から二十四歳の間詠まれたことになる。義清は十六、七歳頃、徳大寺家に隨身として仕えるようになり、その翌々年頃、拔擢されて鳥羽院の下北面の武士となった。そして二十三歳の保延六年十月に出家したのである。崇徳院の行幸の鈴の奏を

聞いて詠んだ(1)の歌は、義清の二十歳前後の作と考えるのが妥当であろう。この歌は、西行と崇徳院の関係を示すもつとも早い歌である。

次に(2)は、仁安三年（一一六八年）、西行五十一歳の年に、讃岐国白峰の崇徳院の御陵に参拝した時の作である。そして西行の歌には、これ以後に詠まれた崇徳院関係の歌は見当らないのである。

(1)が二十歳前後の歌であり、(2)が五十一歳の歌であるとするなら、西行の和歌の中に、崇徳院関係の歌は、前後三十年あまりに亘って分布していることが知られる。西行の生涯において、崇徳院との関係が、きわめて大きな意味をもっていたことが、歌の上からもわかるのである。

西行と崇徳院との関係交渉の事実については、すでに先学の調査があり、作品への影響も論じられているが、この小論では、作品を通じて両者の関係の意義を跡づけてみようと思う。崇徳院およびその周辺の人々の存在と動きが、西行和歌の世界とどのようにかかわっているかという問題を、いま一度、検討してみようとするのが、この小論の目的である。

二

崇徳院は元永二年（一一一九年）の生れで、西行より一歳の年下である。鳥羽天皇の第一皇子で、母は待賢門院璋子であるが、実は、鳥羽上皇の祖父の白河法皇が、孫の中宮である待賢門院と通じて生れた子であるという説がある。五歳で即位し、在位十八年の後、永治元年十二月に位を近衛天皇に譲った。これに関しても、鳥羽上皇が、寵妃美福門院腹の体仁を即位させるべく、崇徳天皇に退位を迫ったという説が有力である。

心ならずも退位を余儀なくされた崇徳院は、和歌に情熱を燃やし、天養元年（一一四四年）には「詞花和歌集」選進の院宣を下し、自ら「久安百首」の作者ともなった。しかし、近衛天皇の死後、鳥羽上皇が後白河天皇を立てるに及んで不満が爆発し、鳥羽上皇没後ただちに保元の乱を起した。しかしこれは後白河天皇側の勝利に終り、崇徳院は讃岐国に流された。そして讃岐配流後八年目の長寛二年（一一六四年）、その悲劇的な生涯を終えたのである。

一方、崇徳院の生母の待賢門院璋子は、徳大寺家の出で、藤原公実の女であり、西行が仕えた徳大寺実能の妹に当る。徳大寺家の三代、すなわち実能、公能、実定は、いずれも勅撰集の歌人としても知られ、和歌愛好の雰囲気を持つ家柄であった。西行の和歌の教養は、少年時代に徳大寺家に出仕することを契機として身につけられたものが多かったと考えられている^{註一}。待賢門院の女房には、堀河やその妹中納言などの女流歌人が居り、西行との贈答歌もある。西行は、徳大寺家に出仕し、さらに宮廷に出仕するようになって、和歌の雰囲気に触れる機会を得たのである。そして待賢門院の縁故に

よって、崇徳院との交渉も始まったのである。

先にあげた(1)の歌は、窪田章一郎氏によれば、「鈴の奏という特殊な具体的なものを素材として、院に寄せる崇敬の感情を内容とした歌^{註二}であるが、崇徳院の近辺に侍した二十歳前後の若い義清が、宮廷の華やかな行事を眼前にして、君主の栄華のさまに心から感激し、それを寿いだ歌といえよう。

徳大寺家の隨身として、崇徳天皇に近いところに在った義清が、鳥羽上皇の下北面の武士として仕えることになったのは、西行の生涯における一つの転機であった。鳥羽上皇が、自らの身辺を警固させる下北面の武士に義清を抜擢したのは、名門佐藤氏の出身である義清の、武芸、和歌、蹴鞠などの多彩な才能に注目したためであるが、この有為な青年を崇徳側から自らの陣営に引き抜こうという、政治的な意図もあったに違いない。院の下北面の武士となることは、武門の出である義清には名誉なことであるが、これは、崇徳側と鳥羽側の板ばさみになる原因ともなった。こうした立場におかれた義清が身の処し方に苦悩したことが、やがて出家の原因の一つともなったのである。

鳥羽院に仕え、その信任の厚かった西行は、崇徳天皇にも変らぬ敬愛の情を抱いていたと思われる。しかし、保延五年（一一三九年）五月、鳥羽上皇に美福門院腹の皇子体仁が生れ、八月に美福門院が女御となるに及んで、崇徳天皇と待賢門院には暗い影がさし始める。依然として、政治的な実権を握っていた鳥羽上皇が、いずれはこの皇子を即位させようとする意図をもっていることは明らかであった。宮廷の権力争いは、この頃からようやく深刻さを増しつつあった。

義清が突然世を捨てて、法名円位、西行と号したのは、皇子体仁

誕生の翌年、保延六年（一一四〇年）十月十五日のことであった。そして、翌永治元年十二月七日に、崇徳天皇は退位したのである。

西行の出家の原因については、すでに諸家の説があるので、今はその問題には深く立ち入らぬことにしたい。しかし、「一〇月十五日が出家の日であり、院の退位は翌年十二月七日という関係は、注意されていいことと思う。出家を踏み切ったことについて失恋説が強く主張されているけれど、比重からみて、この社会的情勢、政治社会にからむ事件のほうか、はるかに重く思われる。」^{注三}という窪田章一郎氏の説は、西行と崇徳院の関係を考えてゆく上で、重視しなければならぬ点を指摘していると思われる。

西行はもちろん、直接に政治の動向を左右するような社会的地位にあつたわけではないが、鳥羽上皇側近の武士として、世の中の動きを見通すのに多少有利な場にいたことは確かであった。そこで西行は、世の中がいかなる方向へ動いて行くかという展望を持ち得たと思われる。政治的な動きに直接参与しなくとも、身辺の雰囲気や敏感に知るような感覚を西行が持っていたことは、後の文学的生涯に照らしても明らかである。

鳥羽上皇と崇徳天皇の二つの勢力の間に在って、身の処し方に苦悩した西行は、おそらく崇徳側の没落をいち早く予感したのではなからうか。そして西行は、両者が決定的な対立に至る手前で、両勢力から潔く身を引いたと考えるのが妥当であろう。西行の置かれていた社会的な立場を考えた時、出家の理由を失恋という個人的な理由のみでとらえるのは充分ではなく、社会的、政治的状况との大きなかわり合いを見出そうとする説を支持したく思うのである。

西行は出家に際して、次のような歌を詠んでいる。

鳥羽院に出家のいとま申し侍るとて詠める

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助け
め

詞書によれば、右の歌は鳥羽院に出家の挨拶として献上した歌であることが明らかである。内容に関しては、「やや性急ともいえるけれども、ひたすら自らに言い聞かせ、強い調子でおのれの決意を貫こうとしているものがひびかしているさわやかさもある。」^{注四}という安田章生氏の批評が、最も要を得ており、苦悩の末に出家に踏み切った西行の、決意の表白という点で、諸家の見方は一致している。

出家当時、鳥羽院に仕えていた西行の身分を考慮すれば、挨拶の歌を献上した対象が鳥羽院であることに不思議はない。しかし、果たして、こうした生々しい心境告白の歌を、実際に鳥羽院に献上することが出来たかどうかについては、疑問もあるのである。むしろ、「詞句がいささか荒らかで献上した歌ではなく、ひそかに私懐を陳べたのであろう。」^{注五}という伊藤嘉夫氏の説が卓説であると思われる。

それでは西行は、崇徳院に対しては、出家の暇乞いの歌を献上しなかつたのであろうか。

「山家集」の雑歌の中に、出家前後の作と考えられている次のような歌がある。

(1) くれたけのふししげからぬ世なりせばこの君はとてさしいでなまし

(2) あしよしをおもひわくこそくるしけれどだあらるればあられる身

(1)の歌に注目して、伊藤嘉夫氏は「この君」を「崇徳上皇をさし奉るか」^{注六}と推定し、窪田章一郎氏もその説に従っている。世の中のことは煩しいが、そうした煩しさが無い世の中ならば、自分はお

それからお仕えしたであろう、という歌意であるが、「この君」が崇徳院を指すとすれば、歌の意味はかなり深長である。この歌の制作時期が、出家直前か直後かは確定し難い。しかし、出家に際して、鳥羽院に挨拶の歌を献上した西行が、同じ時期に、崇徳院を「この君」と定めて仕えたかった、と私懷を述べているのである。(1)の歌は、技巧的な修辭を施して、心情はかなり抑制された形で表現されているものの、この歌から、むしろ崇徳院により親密な感情を抱いていたことが想定されるのではなからうか。

(2)の歌も同様に、出家前後の西行の心境を反映した歌である。内容の上からも明らかに(1)とつながりがある。わずらわしいことの多い世の中ではあるが、善悪に拘泥せずに俗世に在れば、それはそれで過せぬわが身ではないが、という自省の歌である。「あしよし」はこの場合、当然、世の善悪であり、それに正面から対処しようとする潔癖な性情をもっているからこそ、西行は善悪の判断で苦悩したのである。そして、世の中の流れに乗ることを捨てて、出家の道を択んだのである。

いささか大胆な推定をするなら、西行は、鳥羽院の周辺にあって、鳥羽側の勢力が、対立する崇徳天皇を窮地に追い込むような不穏な動きを目撃したのではあるまいか。その策謀の主体が鳥羽院その人であったか否かは別として、そうした動きの中で、崇徳天皇が次第に追いつめられてゆく空気を、西行は敏感に感じたのである。その時、善悪理非の観念と己れの取るべき立場をめぐって、西行は真剣に悩まざるを得なかった。そこから(1)や(2)の如き心境告白の歌が生れたのではなからうか。このように考えると、西行の出家という行為に、崇徳院の存在は、想像するよりも大きくかかわっていたのではないかという見方もできるのである。

三

崇徳院が退位を余儀なくされたのは、西行の出家の翌年、永治元年のことであるが、他に、崇徳院周辺にも大きな出来事が相ついでおこっている。そこで、西行の出家後数年間における崇徳院及びその周辺の動きの主なるものを示すと次の通りである。

保延六年
(一一四〇)

十月十五日、義清出家。

永治元年
(一一四一)

三月十日、鳥羽上皇落飾。

十二月七日、崇徳天皇退位。

康治元年
(一一四二)

十二月二十七日、近衛天皇即位。

二月二十六日、待賢門院出家。

堀河局、中納言局も出家。

三月十五日、西行、藤原頼長を訪ね、待賢門院結縁の一品経書写を勧進。

天養元年
(一一四四)

崇徳院、「詞花和歌集」撰進の院宣を下す。

久安元年
(一一四五)

八月二十二日、待賢門院崩御。

待賢門院の女房達、三条高倉第で服喪。

右に明らかかなように、西行出家後の五年間に、崇徳帝の退位、待賢門院の出家そして死去という出来事が、続いている。そしてこれによって、崇徳院と徳大寺家の勢力は没落し、宮廷における勢力関係は、西行の在世時とは大きく変わったのであった。

一方、西行は、この時期にはいかなる生活を送っていたであろうか。

西行は、出家直後は、北山の鞍馬寺のあたりに住んだと推定されている。しかし、出家の年の歳暮には、東山に移ったのではないかと考えられる歌もあり、いずれにしても、出家後の数年間は、京洛周辺を生活の本拠地として、都への断ち難い愛着を感じつつ過したものと思われる。

世の中を捨てて捨てえぬこちして都はなれぬわが身なりけり
は、この時期の述懐歌である。

出家後の西行が身を寄せたのは、北山や東山あるいは嵯峨野の寺で、いずれも天台系の寺院である。台密の宗徒として、まっすぐ修行の道に入るなら、むしろ比叡山延暦寺か、あるいは都を遠く離れた山寺に籠るのがふつうであろう。しかし西行がそれをしなかったのは、京洛周辺に住んで、宮廷や徳大寺家につながる人々との関係を、在俗中と同様に維持しておきたいという心情が強くはたらいたからである。

この時期における西行の生活形態については、風巻景次郎氏の論考に詳しいが^{注七}、西行は生活の本拠地を都からさほど遠からぬ所におき、都にしばしば足を運んだ。そして西行は僧衣をまとうことによつて、在俗時代よりも自由に宮廷社会に出入りすることができた。宮廷の女房達と贈答歌を交わし、仏道の手引きなどをしたこの時期の西行は、ひたすら身を苦しめていた出家前より、比較的自由な生活を送ることができたのである。西行は、出家することによつて、かえって「青春」を享受し得たのである。

しかし、こうした生活は、仏道修行という観点からすれば、明らかに不徹底で中途半端であることを免れない。西行自身も、こうした生活に身を置きながら、一方では自省の気持が強かったのではなからうか。しかもこの時期に、社会的、政治的な状況が大きく変り

つつあったことは、先に述べた通りである。もちろん、出家の身である西行にとつて、政変は、すでに直接かかわるべき性格の事柄ではない。しかし、ある程度の距離を置いて見たにせよ、崇徳天皇の退位は、後の保元の乱の遠因をなす事件でもあり、西行にも大きな事件であったに違いない。しかもこの事件に引き続いておこった待賢門院の落飾および三年後の門院の死去は、いわば西行の「青春」の終幕を告げる出来事であったのである。ここに至つて西行は、出家後数年に亘る自己の不徹底な生活の在り方を反省し、新たな自己確立の必要性を痛感したのである。そして、そして、最初の陸奥への旅は、その大きな試みとして位置づけられなければならない。

西行は、生涯に二度、陸奥へ旅をしている。二度目の旅は「吾妻鏡」の記事によつて、文治二年（一一八六年）に行われたことが確実であるが、最初の旅の時期については、諸説があり^{注八}、未だ決定をみていない。これまでは、西行が敬慕していた待賢門院の死去が直接の契機となつて、門院の死去の翌々年、すなわち久安三年（一一四七年）、西行二十歳の年に旅に出たという風巻景次郎、窪田章一郎両氏の説が有力であった。しかし先頃、これに対し白田昭吾氏が疑問を呈し、作品を詳細に検討することと、西行の信仰の変化（台密から東密への移行）という点から、康治二年（一一四三年）、西行二十六歳の年を出発の時期とみる説を提起した^{注九}。久保田淳氏も「台記」の記事に依り、やはり康治二年説を唱へ^{注十}、現在では、康治二年説がやや有力といえよう。

この問題は、西行の伝記研究における重要な問題点であり、とにかくいづれとも決定し難い。しかし、康治二年説にしても久安三年説にしても、旅の動機に崇徳院およびその周辺の動き、なかならず待賢門院の死去が大きくかかわっているという点では一致してい

る。

風巻、窪田両氏による久安三年説は、待賢門院の死を旅の直接の動機と見る点で、妥当性があると思われる。しかし、旅立ちの年が久安三年なら、それは西行の出家七年目に当り、西行が京洛周辺で生活を送っていた時期が余りに長くなりすぎるところに、問題があるのである。康治二年説は、旅の時期を四年くり上げることによって、この疑問を解消させる。しかしながら、それが待賢門院の死去の前になることには、なおこだわらざるを得ない。

西行の初度陸奥旅行の動機を、永治元年の崇徳天皇の退位とその翌年の待賢門院落飾に大きな衝撃を受けたためと考えることは可能である。しかし、西行が現実の世の中の変転を目のあたりにし、それを自らの青春の終焉という思いでしみじみと悲しく思ったのは、崇徳院周辺の動きが、待賢門院の死というピークを迎えた時である、という考えは、依然、捨て難いのではなからうか^{註十一}。こうした心の動きを、少しく作品によって検討してみよう。

待賢門院の崩御に際して詠まれた哀傷歌はないが、門院死去の翌春、西行は、門院の女房であった堀河局と次のような贈答歌を交わしている。

待賢門院かくれさせおはしましける御あとに、人々またのとしの御はてまで候はれけるにみなみおもての花ちりけるころ堀河の局のもとへ申しおくりける

たづぬともかぜのつてもきかじかし花とちりにし君が行方を

かへし 堀河局

ふくかぜのゆくへしらすものならばはなとちるにもおくれざら

まし

待賢門院の歿後、その女房達は、高倉三条第で一年間の喪に服し

た。右の歌は服喪期間中の久安二年の晩春に、西行が堀河局と交わしたものである。西行の歌は、今まさに散っている花のように、はかなく散っていった君（待賢門院）の御行方は、いくら尋ねても風の便りにも聞かないであろう、という意味の歌で、やや感傷に流れるほどの悲しみの漂う歌である。西行は、待賢門院歿後も、生前と同じグループの中で、こうした歌を詠んでいるのである。

西行が、最初の陸奥旅行に、康治二年に出発したという説に従うなら、右の歌はもちろん陸奥から帰落した後の作である。しかし、歌には、花の如くに散ったはかない待賢門院のあとを偲びつつ、その行方を尋ねるように、長途の旅を志した、という思慕の情があるのではなからうか。そのようにみるなら、陸奥の旅は、この歌が詠まれた後に行われたことになるであろう。

いづれにせよ、旅立ちの年を康治二年とするか仁安三年とするかという問題は、断定が困難な問題である。そこで今は、旅の動機に待賢門院の落飾もしくは崩御が大きくかわっていたことだけを確認して、論を進めたいと思う。

西行は、崇徳院およびその周辺のあわたたしい動きに無常を感じ、あわせて、出家後も数年間、わが身にまわりついてきた甘さや不徹底さを清算すべく、生活の革新を図る必要を感じた。そのためには、何よりもまず都を遠く離れ、新しい世界を模索することが必要であった。それはいわば、西行がそれまで属し、依存していた崇徳院世界からの精神的な独立の試みであったのである。そうした西行の前にひろがっていた未知の世界が、同族の住む陸奥の土地であり、西行はそこを目指し漂泊しようと考えたのである。西行の最初の陸奥旅行の動機を待賢門院の出家もしくは崩御と密接に結びつける見方に対して、それを能因法師をはじめとする先人が歩いた歌枕

を尋ねる風雅の旅であることを強調する見解もある^{注12}。この旅で詠まれた歌が、明かるい雰囲気を持ち、若い好奇心にあふれているところから、そうした見解も生れるのであるが、西行が崇徳院周辺の人々の没落への悲しみを胸底に沈めて、都の社会からの自己解放を希求しつつ、陸奥への旅に出たことは、否定できないのではなからうか。そして二年間に亘る長途の旅を経験することによって、西行は、青年期における一応の自己確立をなし得たといえるのである。

四

西行は三十一、二歳頃から、六十二歳で伊勢に移り住むまで、およそ三十年間を高野山で過ごした。いうまでもなく、真言密教の宗徒として、本格的な修行を積んだのであるが、この間、高野山に籠り切りだったわけではなく、勅進修行の目的で、吉野や大峰山や四国などへしばしば旅に出たのもこの時期である。

西行が高野山に入山した年は、明確には判らない。いま久安四年(一一四八年)ごろと考える説^{注13}に従うと、それは西行三十一歳の頃となる。そして保元の乱は、西行が高野山に入って七年後におこった事件である。保元の乱の敗者崇徳院は、讃岐に流され、八年後にその地で没した。そしてその四年後に行われた西行の四国旅行は、西行と崇徳院の関係交渉において、最も特筆すべき事実である。そこで、保元の乱に際して、西行と崇徳院にどのような交渉があったかという問題から検討してみよう。

保元の乱に先立って、鳥羽院は、保元元年(一一五六年)七月七日、自ら安楽寿院と名づけた鳥羽離宮で崩御した。御年五十四歳であった。この時、西行は、たまたま高野山を下りて京都に来てお

り、葬儀に参列して、次の三首の歌を詠んでいる。

一院かくれさせおはしまして、やがての御所へわたりまゐらせける夜、高野より出であひて、まゐりあひたりける、いと悲しかりけり。こののちおはしますべき所御覧はじめけるそのかみの御供に、右大臣実能、大納言と申しける、候はれけり。忍ばせおはしますことにて、又人さぶらはざりけり。その御供にさぶらひける事の思ひ出でられて、折しも今宵にまゐりあひたる、昔今のこと思ひつづけられて詠みける

(1) 今宵こそ思ひ知らるれあさからぬ君に契りのある身なりけり
をさめまゐらせける所へ、わたしまゐらせけるに

(2) みちかはるみゆきかなしき今宵かな限りのたびと見るにつけても
をさめまゐらせて後、御供にさぶらはれける人々、たとへむ方
なく悲しなげながら、限りある事なれば、帰られりにけり。始めた
る事ありて、あくるまでさぶらひて詠める

(3) とはばやと思ひよりてぞなげかまし昔ながらの我が身なりせば

(1)は在俗時代に恩顧を蒙った鳥羽院の崩御に際して、その感懐を往時を思いおこしつつ詠んだ歌で、むしろ詞書が、心情を伝えてい
る。西行が、出家に際して、鳥羽側と崇徳側の対立の板ばさみの立
場に苦悩したことは、すでに述べた通りである。既にその当時から
十五、六年の歳月が流れているが、この三首の歌には、なお昔の苦
悩の痕跡が認められるのである。往時を回顧すれば、西行はもとよ
り鳥羽院には浅からぬ因縁の身であることは当然である。そこで西
行は、鳥羽院の葬儀にも列なり、往時を述懐し、真情のこもった長
い詞書を付した(1)の哀傷歌を詠んだのである。

(3)は、第二句に異伝があり、流布本「山家集」および「異本山家
集」では、第二句を「思ひ寄りてぞ」とする。この歌はむしろ第二

句を「思ひ寄りてぞ」とする本文に従い、歌意を、鳥羽院は亡ってしまったが、院の本当の心はどんなものであったのか、それを尋ねたく思い、院に迫って嘆くことであろう、在俗時代の自分であったならば、と解釈したい。窪田章一郎氏も、ほほこのように解釈して、「院に尋ねてみたいことがある。おそらくそれは院と崇徳院に関することであり、不穏な戦乱前夜にまで発展している一切の原因となったことでもあろう。」^{註十四}と歌意を補っている。

(3)の歌を右のように解釈すると、西行は、鳥羽院の生前の恩義は深く感謝しつつも、鳥羽院の、崇徳院に対する態度については、心を痛め、寂然とせぬものを抱き続けていたことになる。しかしそれは、鳥羽院に対する非難の気持ではなく、崇徳院に対する同情から、鳥羽院の本心をたずねたいとする欲求であったと思われる。

保元の乱は、鳥羽院崩御後九日目の七月十一日におこった。鳥羽院の葬儀の後も、引き続き京都在滞していた西行は、この内乱に際会することになった。ここにも西行と崇徳院の宿命的なつながりが感じられるのである。

乱は藤原忠通、源義朝、平清盛と結んだ後白河天皇が、藤原頼長、源為義、平忠盛と組んだ崇徳院側を制し、直ちに勝敗は決した。捕われた崇徳院は、仁和寺で出家した。この時、西行が、崇徳院を尋ねて詠んだのが次の歌である。

世の中に大事いできて、新院あらぬさまにならせおはしまし
て、御ぐしおろして仁和寺の北院におはしましけるにまゐり
て、兼賢阿闍梨いであひたり。月あかくてよみける。

かかるよにかげもかはらずすむ月をみる我が身さへうらめしきか
な

この年、西行は三十九歳であった。徳大寺家の隨身である縁故を

もって、徳大寺家から出た待賢門院を生母とする崇徳院の知遇を得るようになってから、西行と崇徳院の関係はすでに約二十年にも及んでいる。この間、西行は二十三歳で出家したので崇徳院との距離は、出家後は当然、遠くなったであろう。しかし、西行の内部における崇徳院の存在は、決して稀薄になったとは思われない。とくに、崇徳院が退位後、和歌に情熱を燃やすようになったことによつて、和歌を媒介とする両者の結びつきは、むしろ内的に強まったとさえ考えられる。しかし、保元の乱に敗れることによつて、崇徳院の身には、最大の非運が訪れたのである。

西行は、こうした破局をすでに出家の頃ある程度、予想していたのかもしれない。しかしそれが、鳥羽院の死後、旬日を経ずして訪れるとは、予測できなかったであろう。「世の中に大事いできて」という詞書の一節には、事変に際しての西行の驚きの念が、そのまま表現されているといえよう。

乱直後の、混乱の巷を仁和寺に馳せ参じ、敗者で囚われの身となっている崇徳院に歌を奉るという行動は、たとえ僧綱の位をもたぬ一介の緇衣にすぎぬ西行であっても、かなりの勇気を要することであった。しかし、その危険を冒しても、敢えて崇徳院の安否を問わずにいられなかったところに、西行の崇徳院に対する深い同情と、ひたむきな性情がみられるのである。

右の歌については、平凡で、やや形式に流れすぎており、感動の切実さに乏しいという批評もある。しかし、この歌に限らず、西行の崇徳院に対する心情は、歌に直接あらわれたものだけでは判断できぬものがあるように思われる。両者の関係の事実は、西行の和歌を通して知られるところが大部分であるが、心の結びつきは歌の奥深いところ、あるいは歌を超えたところにあると感ぜざるを得ない

面もあるのである^{注十五}。

しかも右の歌は、保元の乱直後の、厳しい雰囲気の中で、あわただしく詠まれたもので、取次ぎに出た兼賢闍梨を通じて奉った歌である。この歌は、おそらく崇徳院の手許には渡らなかつたであろうという推定もあり、内面の切実な思いを憚るところなく詠出するのは、無理な状況であった。しかしながら、第五句の「うらめしきかな」という詠嘆に、変わり果てた崇徳院の境遇に対する痛切な思いをよみ取ることはできるであろう。

乱の事後処理は迅速に行われ、崇徳院は、七月二十三日に讃岐配流が決まった。しかし崇徳院が讃岐に流された後も、西行と崇徳院との間には、秘かな連絡の糸が張られていたらしく、その連絡役を勤めたのは高野聖であつたかもしれない。

ともかく、崇徳院の女房と西行が数次に亘って交わした次の贈答歌によって、崇徳院周辺との交渉があつたことは、はっきりしている。

新院、讃岐におはしましけるに、便りにつけて、女房のもとよ
り

水茎のかき流すべき方ぞなき心のうちは汲みて知らなむ

返し

(1)ほど近みかよふ心のゆくばかりなほ書き流せ水茎の跡

又、女房つかはしける

いとどしく憂きにつけても頼むかな契りし道のしるべたがふな
かかりける涙に沈む身の憂さを君ならでまた誰か浮べむ

返し

(2)頼むらむしるべもいさや一つ世の別れにだにもまどふ心は

(3)流れいづる涙にけふは沈むとも浮ばむ末をなほ思はなむ

讃岐にて、御心ひきかへて、後の世の御勤め暇なくせさせおは

しますと聞きて、女房のもとへ申しける。この文を書き具し

て、若人不嗔打、以何修忍辱

(4)世の中をそむくたよりやなからまし憂き折ふしに君があはずば
これもついでに具して参らせける

(5)あさましやいかなる故の報にてかかる事しも有る世なるらむ

(6)ながらへてつひに住むべき都かはこの世はよしやとてもかくても

(7)幻の夢を現にみる人は目もあはせでやよを明かすらむ

かくて後、人の参りけるにつけて、まゐらせける

(8)その日より落つる涙を形見にて思ひ忘るる時の間もなし

返し

女房

目の前に変わり果てにし世の憂さに涙を君もながしけるかな

松山の涙は海に深くなりて蓮の池に入れよとぞ思ふ

波の立つ心の水をしづめつつ咲かむ蓮を今は待つかな

(便宜上、西行の歌にのみ番号を付した。)

(1)〜(3)の三首は、讃岐の崇徳院に仕える女房から贈られた歌に対する返歌であるが、とりたてて論ずべき問題はないであろう。ただし、女房から「道のしるべ」を頼まれたのに対して、(2)の歌で西行は、自分に導師たる資格はないと答えているのが注目される。「一つ世の別れにだにもまどふ心は」は、現世における別離、すなわち讃岐と高野山という空間的なへだたりにすら心が乱れる、という意味で、西行の素直な心境告白である。この贈答歌は、おそらく崇徳院が讃岐に流されて間もなくの時期のものであろう。

右の一連の歌の中で注目すべきは、(4)、(5)、(6)の三首である。

まず(4)は、当時、西行が崇徳院に対して、いかなる感情を抱いていたかという点で、問題にされることが多い歌である。「讃岐にて、

御心をひきかへて、後の世の御勤め暇なくせさせおはしまして」は、讃岐に流された後の崇徳院が、保元の乱当時とは打って変わった御心で、ひたすら後世を願って、勤行に励んでおられる、と解釈できる。西行は、保元の乱を争った崇徳院を、悪しき闘争心を抱いた人として、その政治的な立場を否定し、過去を悔い改め、仏道にいそむ現在の姿を、僧侶の立場から肯定したことになる。

これについて、窪田章一郎氏は「保元の乱における院を西行は認めていない。嗔りて打たれたということ、憂き折節に逢ったということには、どのような事情があろうとも、そしてそのことは西行自身理解していることであるが、仏道信仰の上からは認めがたい誤りであり、罪であったことを、はっきり言っている。」^{注十六}と述べ、「院の現在は、内心安らかに、外の辱を忍んで、悪を加えられても怨まらず報いず、という境地であると理解し、また、励ましをしようとしている。」^{注十七}と解釈している。それに対して、久保田淳氏は「保元の乱を惹起した新院を肯定するとか否定するとかいうような、政治的倫理に関わる判断を、果して西行は持ち得たであろうか。」と疑問を呈し、西行の崇徳院に対する立場は「極めて情情的なものであって、政治的な要素を含んではいなかったであろう。」^{注十八}と、異った見方をしている。そして「新院が勤行に励んでいるという噂は、西行をほっとさせたには違いないであろうが、新院の現在の心境は平静であろうと楽観的な見方をするほど、人間性に対する認識が甘くはなかったであろう。」^{注十九}と結論している。

たしかに、「御心ひきかへて」という詞書の一節を、そのまま崇徳院の心境の変化と割り切って解釈することには疑問がある。西行が得た情報、側近の女房からの便りによるものにはすぎず、自ら確かめた崇徳院の現在の姿ではないのである。讃岐配流後の崇徳院の

説話や上田秋成の「兩月物語」巻一「白峰」にも描かれているように、崇徳院は、世を去るまで現世に執着し、怨念を捨て切れなかったというのが真相であろう。従って(4)の詞書には、そうあってほしいという、西行の願望の気持もこめられているのである。

(4)の歌は、あくまでも、逆境に在る崇徳院への慰めと励ましの歌とみるべきであろう。まだ西行は、僧侶としての立場から崇徳院の行動の是非を批判する高みにまでは達して居ない。人間の煩惱を克服できぬ同じ次元の人間として、西行は崇徳院に同情し、現在の非運を信仰の機縁とすべく励ましたのである。

次の(5)の歌も、いかなる前世の報いで、こうした悲しいことがおこる世の中なのか、余りのことに驚くばかりである、という嘆きの歌であり、理性より感情の勝った歌である。しかし、(6)の歌では、現世の価値を否定し、来世における正覚を願う心が強く前面に押し出されている。現在の揺れ動く心と来世への信仰上の希求とが、なまぜになつて詠まれたのが、以上の三首であると思われる。

(4)、(5)、(6)の三首の制作時期を、崇徳院の讃岐遷幸後一、二年以内とみるなら、当時、西行の年齢は四十歳位である。この時期の西行には、まだ幾分、俗臭が感じられ、僧侶として、ゆるがぬ信念を持つには至ってないと思われる。しかし、保元の乱および崇徳院の配流という歴史の現実を直視することによって、新たな人間観が西行の内部において形成されつつあったのがこの時期である。そして、これを契機として、西行は四十代の本格的な仏道修行へ入ってゆくのである。

崇徳院が讃岐に流された後に、西行は歌友の寂然と、次のような歌のやりとりをしている。

讃岐におはしまして後、歌といふ事の世にいと聞えざりけれ

ば、寂然が許へいひつかはしける

言の葉のなさけ絶えたる折節にありふる身こそ悲しかりけれ

返し

寂然

しきしまの絶えぬる道に泣く泣くも君とのみこそ跡をしのばめ

崇徳院は、在位中、堀河百首題で百首歌を召し、康治元年には久安百首の撰進を命じている。「山家集」には、その折りに、西行が寂超や徳大寺公能と交わした歌もみられる。また、「詞花集」撰進の院宣を下したのも崇徳院であった。そして、この集に、年少の西行の歌が「読人知らず」として一首採られたのも^{注二十一}、おそらく、院の配慮に依るものであろう。

崇徳院はまた、自らも「新中古三十六歌仙」の一人に数えられるすぐれた歌人であり、勅撰集には、総計八十一首入集している^{注二十二}。院の歌の中では、「小倉百人一首」の、

瀬を早み岩にせかるる滝川のわかれても末にあはむとぞ思ふ
が最もよく知られている。

西行が、こうした歌道中興の君主としての崇徳院を尊敬していたのは当然であるし、院もまた和歌を通じて、西行には殊更の親しみを寄せていたと思われる。その崇徳院の遷幸を悲しみ、院なき後の都において、歌道が衰えてゆくさまを嘆いたのが、右の歌である。この嘆きには実感がこもっており、ここにも西行と崇徳院の、和歌を媒介とした結びつきの強さが認められるのである。

五

長寛二年（一一六四年）八月二十六日、崇徳院は讃岐で崩御した。配流後八年目に当り、御齡四十六歳であった。

おそらく西行は、崇徳院在世中に、讃岐への旅を志したのであろうが、諸般の事情がこれを許さなかったのであろう。結局、西行の四国旅行が実現したのは、崇徳院の死後四年目の仁安三年冬のことであった。

旅の出発の時期は、「山家集」の次の歌の詞書によって知られる。そのかみまゐりつかうまつりけるならひに、世をのがれてのちも賀茂にまゐりけり。としたかくなりて四国のかたへ修行しけるに、またかへりまゐらぬこともやとて、仁安三年十月十日の夜まゐり、幣まゐらせけり。うちへもいらぬ事なれば、たなうのやしろにとりつきてまゐらせ給へとて、心ざしけるに、木の間の月ほのぼのに、つねよりも神さびあはれにおぼえてよみける

かしこまるしでになみだのかかるかな又いつかはとおもふあはれに

右の詞書にある「仁安三年」という年は、テキストにより、本文に異同のある個所で、これを「仁安二年」とする本もある^{注二十三}。

この問題は、これまでもいろいろ論じられているが、結着をみないようである。仁安二年か三年かという一年の差は、いまこの論をすすめる上では、さして大きな問題にはならぬと考えるので、一応、仁安三年説に従うことにする。

仁安三年という旅立ちの年が、西行五十一歳の年に当ることは重要である。右の歌の詞書に「としたかくなりて」とあることに注目すると、西行は自らの年齢が五十歳に達したという強い意識を持ったのである。四国旅行は長途の旅でもあり、それに耐え得るか否か、自己の年齢と体力を省みた時、不安を抱き、「またかへりまゐらぬこともや」と思ったのであろう。

野ざらしを心に風のしむ身哉

という句を引き合いに出すまでもなく、旅がさまざまな危険を伴うものであった以上、右の歌がとくに不安な心境を詠んでいるとはいえない。しかし、西行の旅の歌には、出発に際して、右の歌のような不安な心を感じさせるものは、他に見当らず、旅もおおむね健康に恵まれて、のびやかな気分で行われていることが推定される。それゆえ、右の歌には、いささか心身の衰えが目につくのである。

またこの旅には、西行の親友であり、多くの旅を共にした西住が同行する筈であったところ、西住は親類の病気のため、にわかに行でなくなつた。これに關して、西行は次のような歌を詠んでいる。

西の国の方へ修行してまかり侍りけるに美豆野と申す所に、具しならひたる同行の侍りけるが、親しき者の例ならぬ事侍りとて、具せざりければ

山城の美豆のみ草につながられて駒ものうげに見ゆる旅かな
津の国に、やまもとと申す所にて、人を待ちて日かず経ければ
なにとなく都のかたとときく空はむつまじくてぞ眺められける
右の二首の歌にも、西住と離れて、独り出発しなければならなかつた西行の心細い心境がみられる。

これらのことから推して、西行が四国旅行の出発に際して、心身の調子が必ずしも勝れなかつたのではないかと考へるのは、早計であらうか。その不調は、旅行の支障となるほどのものではなかつた筈であるが、他の旅とはいささか異つた状態で、四国への旅に出たのではなからうか。しかしながら西行は、高齢に達し、心身の不調を覚えればなお、この旅へ強い意欲を燃やしたのではなからうか。それは、この旅の目的の一つに、讃岐で崩じた崇徳院の墓参があつ

たからに他ならない。

西行の四国旅行の目的が、崇徳院の御墓に参ることと弘法大師の遺跡巡礼の二つであつたことについては、諸家の説が一致している。そしてその二つの目的のどちらに比重があつたかを考へてみると、それはおそらく前者であつたであらう。

西行にとつて、生前の崇徳院を讃岐に訪ねることは、果たし得ぬ望みであつただけに、崇徳院の墓参は、残された生涯において、何としても為さねばならぬ念願であつた。それゆえ、五十歳という年齢を迎える頃から、この四国旅行は強く志向され、仁安三年によりやく実現されたのである。したがつて、体力の衰えを感じ、前途に不安を抱いても、生命あるうちにこの旅を為しおえたいという望みは、西行の内部において、きわめて強いものであつたと思われるのである。

四国旅行の旅程については、すでに川田順氏や三好英二氏に詳しい考証がある^{三三}。それによれば、西行は、摂津国山本で西住を待ち、結局、おかれてきた西住と共に四国に発つた。播州の飾磨か室津で乗船し、備前国児島に着いた。児島の南端の日比より瀬戸内海を横切り、讃岐国三津野に上陸した。そして松山の崇徳院の行在所跡を弔い、白峰陵に参詣した。次に善通寺の弘法大師の遺跡を巡礼し、その年は善通寺近辺に庵を結んで過ごした。そして翌年の春、帰途につき、中国筋を経て帰洛した。土佐や筑紫に足をのぼしたという説は根拠が薄い。

以上のような行程によつて、西行の四国旅行はなされたと考へられている。

四国旅行における崇徳院関係の歌は、次の三首である。

讃岐にまうでて、松山の津と申す所に、院おはしけむ御あとな

づねけれど、かたもなければ

(1) 松山の浪に流れて来し船のやがてむなしくなりにけるかな

(2) 松山の浪のけしきは変らじをかたなく君はなりましにけり

白峰と申しける所に、御はかの侍りけるにまありて

(3) よしや君昔の玉のゆかとてもかからぬ後は何にかはせむ

「保元物語」によれば、崇徳院は、保元元年七月二十三日夜、仁和寺を発ち、伏見より乗船し、八月十日に讃岐に着いた。上陸の地は松山（現在香川県坂出市）で、一時松山に到着した後、四度郡直島の御所に移った。更に、四度郡鼓の岡に移され、そこが崩御の地とされている。火葬は白峰で行われ、白峰陵に埋葬された。

(1)は、西行が讃岐に上陸した松山の津で、崇徳院の遺跡を尋ねて詠んだ歌である。「院おはしけむ御あとたづねけれど、かたもなければ」という詞書の一節は、おそらく事実を述べていると思われる。遠く讃岐の地に流され、八年後にこの地で生涯を終えた崇徳院の行在所の跡が、荒れ果てていたことは、予想されたいといえ、西行には衝撃であったであろう。西行が松山に着いたのが、仁安三年十一月初旬であったとすると、それは長寛二年八月二十六日に崇徳院が崩御されてわずか四年後である。御跡の荒廃ぶりは、崇徳院をめぐる世の無常をまざまざと感じさせるに充分であったであろう。

西行は、廃墟の前で昔日を想い、崇徳院世界の喪失を実感しつつ、(1)の歌を詠んだのである。「やがてむなしくなりにけるかな」という下二句は、一見、平凡にみえるが、きわめて実感的で、崇徳院の死を改めて事実として確認し、それを哀悼する気持が表白されているのである。

(2)も同様に松山での作である。この地で空しく悲劇的な生涯を終えた崇徳院の運命と、昔と変わらぬ眼前の海浜の風景を対照的に詠

嘆し、院に対する同情が一首全体にしみじみと流れている。

しかし、(1)と(2)の二首は、西行が宿願を達して讃岐の地に到着し、崇徳院の遺跡を前にして詠んだ歌にしては、切実な響きに乏しいともいえよう。西行が、崇徳院の墓をはるばる讃岐に尋ねた行為自体は、人間性に富んだ行為として、後世に伝えられている。たとえば「保元物語」には、

此君御在位の間、恩に浴し徳を蒙る類いくそばくぞや。されども今はなげきの情をかけ奉る者は誰か一人も有し。只此蓮馨・西行のみ参るべしとは、昔つゆもいかでか思召よるべき。

と描かれており、(1)、(2)、(3)の三首は「源平盛衰記」、「古事談」、「椿説弓張月」、「百人一首一夕話」などに引かれて、広く知られている。ことに、上田秋成が、この三首の歌を素材として、「雨月物語」の「白峰」の物語を構想したことは有名である。

しかし、右の二首が、やや感動の衝動性に乏しいからいがあることは、否定できないであろう。これについてはしかし、窪田章一郎氏が「言葉の麗わしさと、調べの優しさは、個人的感懐をあらわに出すことをせず、婉曲な物言いになっている」と批評し、「これは手向けの歌の性質としていいうことで、院に寄せる心情が儀礼的でおさなりであったということとは、全く別個のことである。」(註四)と述べているのに従いたい。崇徳院に対する心情は、こうした「手向けの歌」に盛り込めるほどひと通りのものではなく、複雑で底の深いものであった筈である。(1)と(2)は、表面的には切迫した感動性に乏しいが、むしろ、歌の余情にみるべきものがあるように思われる。

(3)は、白峰の御陵の前での作である。この歌の根底には、当然、僧侶としての西行の思想・信念があり、そこから強く崇徳院に呼びかけているのである。崇徳院遷幸後まもない頃、西行が院の側近の

女房に贈った歌に、

世の中をそむくたよりやなからまし憂き折ふしに君があはずは
 があった。右の歌が、経文の句を引いて、やや観念的な立場から崇
 徳院を励ました歌であったのに対し、(3)の歌は、墓前で崇徳院に直
 接呼びかけた歌として、切実な響きがある。そして、仏教思想はす
 でに西行の内部において確立をみており、そこに西行の十年の修行
 の重味が感じられるのである。

この歌について、窪田章一郎氏が、崇徳院はすでに仏になってお
 り、人間的な愛憎の感情を超越した境地にいる、とみて、西行はそ
 うした崇徳院の菩提を祈願してこの供養の歌を詠んだのだ、と解釈
 する^{註二五}のに対し、久保田淳氏は「既に解脱していると思われる
 精霊への呼びかけとしては、この歌は説得調が強すぎると考える。
 未だ怨念は消えていないのではないかという懸念があるからこそ、
 西行はその菩提を祈らずにはいられなかったのではないであろう
 か。」^{註二六}と別の見解を示し、あわせて、これらの歌が後年の崇徳院
 怨霊説話の一つの核になるような性格を持っていることを指摘し
 た^{註二七}。

たしかに、(3)の歌には、院に対する呼びかけ又は説得の歌であ
 り、根底に仏教思想があることは事実である。しかし、なにゆえ地
 下の崇徳院に向って、切実で強い呼びかけを行ったのかと考えるな
 ら、久保田氏のいうように、崇徳院が未だ安らかに成仏していない
 のではないかという危惧の念が、西行にはあったのである。それゆ
 え、その鎮魂のために、真情をこめて、墓前で崇徳院に呼びかけた
 のであろう。西行が四国を訪ねた目的の一つは、崇徳院の墓参であ
 ったが、それは生前の恩顧に対して報いるという報恩の意味だけで
 はなく、僧侶としての立場から、鎮魂を行なうという意味もあった

のである。

なお、四国旅行の歌の中に、崇徳院関係の歌が三首しか存在しな
 いことには、若干の疑問が感じられる。西行はこの四国旅行におい
 て、旺盛な作歌力を示しており、海浜の風物を詠んだ連作や、長文
 の詞書を付けた弘法大師の遺跡巡礼関係の一連の歌が異彩を放って
 いるのに対し、崇徳院関係の歌は、量的に少なすぎる感じもするの
 である。先に述べた通り、西行の崇徳院に対する思いは、歌を超越
 したものであったともいえるので、必ずしも歌の数のみで云々する
 ことはできないであろう。しかし、四国旅行における崇徳院関係の
 歌稿が、西行自身の手で隠されてしまったか、あるいは失われてし
 まった、ということも考えられるのではなからうか。

以上みてきたように、西行の四国旅行は、半生に亘る崇徳院との
 関係に、終止符を打つべくなされた旅であった。この旅において、
 崇徳院関係の歌は、実際には三首しか詠まれなかったものの、その
 三首は、崇徳院に訣別を告げ、あわせて院の鎮魂を祈願する歌とし
 て、重要な意味をもっている。そしてこの旅を通じて得られた思索
 と体験が、西行の人間性を深め、晩年の西行の、人間存在の根源性
 への深い洞察をもたらす契機となったのである。

注

- 一、窪田章一郎『西行の研究』一一四頁。
- 二、同書・一二二頁。
- 三、同書・一二〇頁。
- 四、安田章生『西行』二六頁。
- 五、伊藤嘉夫校注『山家集』二九〇頁注。
- 六、同書・二二八頁注。

七、風巻景次郎『西行と兼好』。

八、川田順・三好英二・臼田昭吾・久保田淳氏は康治二年（二十六歳）

説。尾山篤二郎氏は三十歳以前。窪田章一郎・風巻景次郎氏らは久安三年（三十歳）説である。

九、臼田昭吾「西行の初度陸奥の旅に就いて——その時期と意義」（『静岡英和女学院短大紀要』第一号）。

十、久保田淳『新古今歌人の研究』四六頁。

十一、富士正晴氏は「二十三歳で出家を決意さっぱり行動した時、その動機をなした状況と、二十八歳でつきあった状況とはその無常感の濃厚さにおいて、段ちがいに後の方が大きかったはずだ。前のは脱出でよかった。今度のは脱出するよりも何より、目の前で現実が崩壊し、そして拡散して、無のみ残ったという感じであり、京そのものが空しくなった。京には見るもの聞くものにつけて、やり切れぬ空無の感が濃くなるばかりである。そこで、思いついて京を離れたと思う。とともにその空無にただ悩む自分に、仏道に入ったものとしての修行のたかなさ、自らを苦しめる苦しめようのたかなさを感じる。そこで、京から思えば恐ろしいような陸奥の方へ修行の旅に出る気になったのではあるまいか。」（『西行 出家の旅』）と述べている。

十二、臼田昭吾、前掲論文。

十三、川田順『西行』二六頁。

十四、窪田章一郎、前掲書二〇二頁。

十五、三好英二氏は「ともあれ、保元の乱は、西行にとって生涯の傷心事であったことは想像に難くなく、——濁世の事として、冷然と眺めていたとは考へ難い。——余りの痛ましさに彼は、それを直接に歌に詠むことなどは到底出来なかったといふのが真相ではなからうか。」と述べている。崇徳院や待賢門院の崩御を直接詠んだ歌がないことや四国旅行の際、崇徳院関係の歌を三首しか詠んでいないことについても、こうした見方が可能であろうか。

十六、窪田章一郎、前掲書二〇七頁。

十七、同書二〇八頁。

十八、久保田淳、前掲書六四頁。

十九、同書六四頁。

二十、『詞花集』に採られた西行の歌は、「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけり」で、凡卑の身なる故をもって、「読人知らず」として採られた。またこの歌は、西行の、勅撰集に載った最初の歌である。

二十一、「勅撰作者部類」（『和歌文学大辞典』所収）による。

二十二、妙法院本「山家心中集」及び「夫木抄」第三十六には仁安二年とあるが、近衛家本「山家集」、「異本山家集」、「陽明文庫本「山家集」などには仁安三年とある。

二十三、川田順『西行の伝と歌』、三好英二氏『西行歌集』。

二十四、窪田章一郎、前掲書二七〇頁。

二十五、同書二七〇頁。

二十六、久保田淳、前掲書七一〜七二頁。

二十七、同書七二頁。

Summary

Sutokuin and the poems of Saigyô

Shinichi NISHIMURA

Saigyô is a priest poet in Heian period. Sutokuin is an Emperor and an excellent poet of the same age. Saigyô became acquainted with Sutokuin in his young days, and had a high regard for Sutokuin throughout his whole life. Saigyô deeply deplored when Sutokuin abdicated his throne and his mother Taikenmonin entered the priesthood. He made a long journey for Michinoku districts to forget the deep grief.

After seven years, since Saigyô began to live Kôyasan, it happened civil war of Hôgen. Sutokuin lost the war, and was confined in Ninnaji. Saigyô called to inquire Sutokuin and gave him a poem of comfort.

After Sutokuin died in Sanuki, Saigyô visited the grave of Sutokuin. His heart was overflowed with gratitude, when he thought of Sutokuin. So, he wrote famous poems at the front of the grave.

Such, Saigyô had close connection with Sutokuin. The meaning of the relation of Saigyô to Sutokuin, that is the main subject of this essay.